

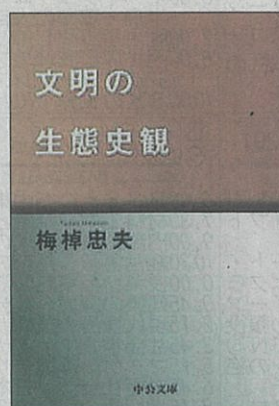
生誕100年 没後10年

現代を射る 梅棹忠夫の目

世界の文明史を独自の観点で解き明かした文化人類学者、梅棹忠夫（1920～2010年）の生誕から6月13日で100年、7月3日には没後10年を迎える。人類史を大づかみした「文明の生態史観」で分野を超えた洞察を示し、国立民族学博物館の構想を描いて初代館長を務めた。情報の本質を突いた「知的生産の技術」はインターネットの時代にも増刷を重ねる。グローバル化が進み、大量の情報が行き交う時代。時を超える「梅棹の目」は、コロナ禍で揺れる現代社会にも有効な視点を与えそうだ。



東洋・西洋の枠組み超え

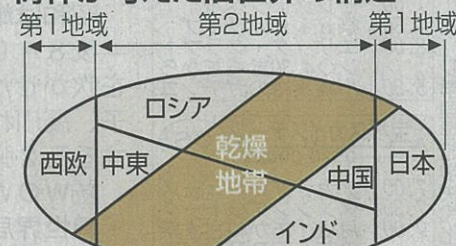


「あらゆる議論をし、議論を楽しんだ。ビール飲み放題で。梅棹さんにコテンパンにやられ、論理構築の難しさも思い知りました」

国立民族学博物館の松原正毅名誉教授（78）は昭和30年代後半の、京都・梅棹宅での定期会合を懐かしむ。梅棹はこの「金曜サロン」で地球といわず宇宙といわずさまざまな話題を取り上げて語り、多くの研究者を育てた。梅棹が36歳の時に総合雑誌に発表した論考「文明の生態史観序説」は高い視点に

立つ梅棹らしい、またその名を世に知らしめた出世作である。
〈ここであつたのは、問題の旧世界を、ハッサリ二つの地域にわけよう。それぞれを、第一地域、第二地域と名

梅棹が考えた旧世界の構造



※「文明の生態史観」(中央公論社)を基に作成

文明

梅棹忠夫の生涯

大正 9(1920)年	京都・西陣の商家に生まれる
昭和16(41)年	京都帝大理学部入学
18(43)年	同大学院で動物生態学を専攻
24(49)年	大阪市立大理工学部助教授
31(56)年	「モゴール族探検記」刊行

勲一等瑞宝章の受章会見に臨む梅棹忠夫。イールドワーカー。学者のなかでも足でプ。足で歩き目を見て、自分の頭で考え「条」と述べた
平成11年、国立民族

「情報」の本質と向き合



国立民族学博物館は今秋、梅棹生誕100年記念企画展「知的生産のフロロントニア」の開催を予定している。担当の飯田卓教授(50)は「一見関係のなさそうなことを集め、それらの間に意味を見つける洞察力があった」と言っ。軽々と分野を超える梅棹の知的活動とその背後にある思想は、インターネット

で情報があふれる時代にこそ有効だ。〈なにかもカードにかくこと〉にしてみました

「知的生産の技術」(岩波新書)に、梅棹はそう記す。フィールドでの調査もふと気づいた考えも、すべてB6判(12・8センチ×18・2センチ)カードに記録した。同書はベストセラーとなつて実践を試みる人たちが続出し、「京大式カード」として市販までされた。〈蓄積の装置というよりはむしろ、創造の装置〉

梅棹はカードは保存が目的ではない

知的

「私はフ
稼ぐタイ
るのが信
学博物館

32(57)年	「文明の生態史観序説」発表
38(63)年	「情報産業論」発表
40(65)年	京都大人文学研究所助教授
44(69)年	同教授
「知的生産の技術」刊行	
49(74)年	国立民族学博物館館長
平成 5(93)年	同顧問
22(2010)年	死去、享年90

松原正毅

国立民族学博物館名誉教授

まつばら・まさたけ 京都大
大学院文学研究科修士課程修
了。京大人文学研究所講師、
国立民族学博物館教授、坂の上
の雲ミュージアム(松山市)館長
を歴任。専門は遊牧社会の研究。



「東洋や西洋といった枠組みから離れ、遊牧民が歴史変動の原動力になっている」と見抜いた。多くの研究者は自分の学問の狭い範囲に閉じ籠もってしまい、領域を超えることは誰にでもできるものではない」

「生態史観」は未来も見通していた。第二地域について、こんな記述がある。

〈内部が充実してきた場合(略)共同体がそれぞれ自己拡張運動をおこさないとは、だれがいえるだろうか〉

中国の南シナ海での領有権主張活動や、ロシアによるウクライナ南部クリミア半島併合を予言したかのようだ。

梅棹は司馬遼太郎(1923〜96年)と何度も対談し親交が深かった。両者をよく知る松原氏は言う。

「ともにイデオロギーにとらわれず、現場を歩いて考えることを大事にした。既存の枠組みの外でどんな思索ができるのか、二人から学べることは多い」

感染症の破壊力

「文明の生態史観」で梅棹は、第二地域の遊牧民について「はげしい破壊力」を強調しつつも、その原因について「的確なことをいうことはできない」と留保している。感染症に詳しい長崎大熱帯医学研究所の山本太郎教授は「実はペストが関係していたのかもしれない」との見方を示す。

ユーラシアの半乾燥地帯の風土病であったペストは何度も、中国や欧州に感染拡大して打撃を与えた。欧州では14世紀の感染で、人口の3分の1が死亡したとされる。免疫を持たない人々に与える感染症の破壊力は、欧州人が新大陸に進出する際にも示された。

山本氏は「この『はげしさ』が遊牧民の軍力だけではなく、感染症によるものだと考えられないでしょうか」と話した。

たて

の生態史観

「生態史観」で梅棹は、ユーラシア(旧世界)を横長の長円に例え東西の両端が第一地域で、広大な東部が第二地域。日本と西欧を含む一地域では封建体制を経て資本主義が発達したが、中国やロシアなどの第



国立民族学博物館館長
時代の梅棹忠夫―昭和
52年11月の開館を前に

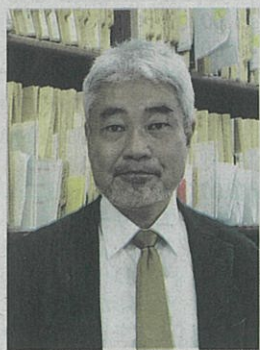
い方

生産の技術

くり返し「繰るもの」だと強調する。雑多な情報をカードで規格化し、それらを使ってはじめて知的生産活動になる。

「つながりや関連を見つけるためにヤッフルしたり、並べ替えたりすることができる。いろんな事例を眺めていることを楽しんでおられた」

飯田氏はそう話す。梅棹の情報に引き合う原点は、学生時代に熱中した登山だ。旧制京都一中出部の「山城三十山記」に梅棹が書いた編集後記に、目の前の雑多な現実



飯田卓教授

から論理を探る姿勢が垣間見える。〈学問的研究的な態度であってこそ山の案は、うんとよくわかる(略)実には山は一大総合科学研究所〉同じく山に親しんだ飯田氏は「山では現実が複雑に絡み合っている存在している」と話し、梅棹の野外体験が学問や情報に向き合う姿勢を育てたとみている。

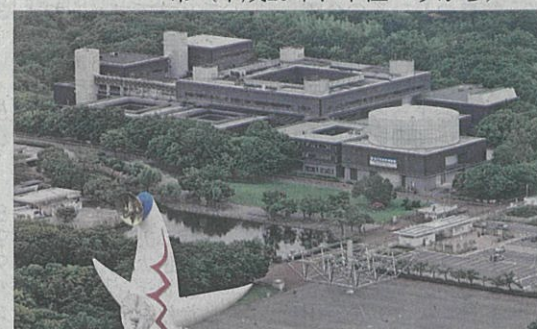
岩波書店によると、「知的生産の技術」は近年も着実に増刷を重ねて99刷を数え、総発行部数は145万部超。

岩波新書では「大往生」(永六輔)、

「日本語練習帳」(大野晋)などに続く歴代第4位という。新書編集部の中山永基副編集長は「梅棹さんが紹介する手法の一つ一つに『なぜそうするのか』という問いがある。メールやSNS、オンライン会議と新しい情報技術への適応が求められるなか、ハウツーではなく方法論をアップデートさせてくれる内容であるがゆえに読まれ続けているのだと思います」と話した。

「知的生産のフロンティア」展では梅棹が作成した調査記録カードなどの展示を通して、「知的生産の技術」の舞台裏を紹介する。新型コロナウイルス感染拡大で春の開催が秋に延期され、9月3日から10月20日を予定している。状況によっては変更もあるため、同館のホームページで確認が必要。

万博跡地に建つ国立民族学博物館。手前は太陽の塔―大阪府吹田市(平成19年、本社ヘリから)



とも真摯にかつ先鋭的に実現するものです」と話した。

技術」だと誇った(「行為と妄想 わたしの履歴書」)。

民博は日本の民族学研究をリードしてきた研究機関でもある。現在は世界全域をカバーする約60人の研究者を擁し、これまで収集した約35万点にのぼる資料は20世紀後半以降に築かれた民族学コレクションとしては世界最大という。

吉田憲司館長は「民博は今、世界中の人々と共に知識や経験を次代に伝え、未来を創造する拠点としての役割を果たしつつある。それは梅棹さんの『現代文明のアバンギャルド(前衛)たれ』という言葉をもっ

斬新な研究・展示 初代館長の思想体現

民博

大阪府吹田市の千里丘陵に建つ国立民族学博物館は「民博(みんぱく)」の愛称で親しまれる。昭和45年開催の万国博覧会の跡地に同52年に開館した。設立に尽力し初代館長を務めた梅棹忠夫は、任意の番組をブースで選べる「ビデオテーク」展示や、光ファイバーを張り巡らせて館内コンピューター網を構築するなど新技術を積極的に導入した。梅棹は民博を「知的生産の巨大

編集後記

合理性・普遍性への志向

梅棹は熱心なローマ字推進論者であった。漢字かなまじりという複雑な日本語表記を簡素化し、外国人にも学びやすい開かれたものにすべきだと訴えた。平成16年、著書「日本語の将来」

を刊行した際にインタビューした私に、「日本文明が生き残っていくためには、国際的な日本語にしないといけない。ローマ字にすれば、日本語を使う外国人はもっと多くなるはずです」と語った。他の業績と違って異論も多いただろうが、梅棹の思想の根底につながる考えだと感じた。それは普遍性への志向だ。若いころ梅棹は人工的な国際言語である 에스เปรانت語にも傾倒した。強固な合理主義者で、理解しやすい簡潔明瞭な文章は情報伝達に徹するかのようだった。京都生まれだが文化よりも文明を語る人であった。65歳の時に病気で視力を失った。心の千里眼で世界や未来を見渡していたのだ。(坂本英彰)

デザイン・森井真理/レイアウト・鮫島有紀子